

# いわゆる竹林七賢について

丹羽 兌子

【要約】 竹林七賢なる人々は、清談を楽しんだ隠棲者として理解されることが多い。しかし彼らの交友関係と生き方を詳細に検討してみると、彼ら一人一人が隠棲者たらんと志してはいなかったことが容易に理解できる。いわゆる竹林清談は、二四九年の司馬懿のクーデターの直前から十年ほどの間、山陽の嵇康を中心として行われたものと考えられるが、魏晉交替という特殊な状況のもとで行われたこの清談には隠棲を図るというよりは、むしろ政治的災難からの保身のために政界から一時的に退避するという意図を強くみることができるといえる。

清談は、起源的には後漢末より士大夫の家庭生活の中で発達した消遣的談論であるが、しばしば人物評論の風潮と結びつくことによって、世論をかきたて、或る種の社会的勢力を形成するという、いわゆる「浮華」の風潮の交友の具となった。これに反し、竹林清談を境としてその後の清談においては政治世界からの退避を図る韜晦的談論という性格が強くなってきた。竹林清談は韜晦的清談の祖型でありながらも、なお、ここには転換期における士大夫の生き方の種々の側面を見ることができるといえる。

史林 五〇巻四号 一九六七年七月

は し が き

致する時代なのである。

青々とした竹林の下で清談に明け暮れたという竹林七賢

魏晉の交替は、華々しい戦乱を通じて実現された漢魏の

は、任誕の風のさきがけとなったものとしてその責任を問

革命と異なり、もっと静かではあるが陰險な政争の中で実

われもしたが、一面また俗塵を離れた隠棲者というイメー

現されていた。魏晉対決の中で一種の不安と緊張に包ま

シをもつて親しまれてもきた。

れていたと思われるこの時期こそは、竹林七賢の時代に一

陳留の阮籍、譙国の嵇康、河内の山濤、三人年皆相比ぶも、

康、年やこれに並ぐ。此の契に預る者は沛国の劉伶、陳留の阮咸、河内の向秀、琅邪の王戎。七人常に竹林の下に集りて肆意酣暢す。故に世に竹林七賢という。『世説新語』任誕篇。

竹林の清談の事実そのものは、魏末の一時河内山陽の片田舎でひそやかに行われたにすぎないけれども、それは又、魏晋時代士大夫の独特な生き方の象徴であると見られるものがある。なぜなら、彼らの行った清談こそ、魏晋士大夫の精神生活、社会生活の場を特色づける文化の一形態だったと言えるからである。本論は魏晋時代に生きた士大夫の一範形として、ここに竹林七賢をとり上げ、彼らの生活と清談のあり方を観察する中で、竹林清談の性格を考え、てみようとするものである。

### 一 魏晋清談の性格について

まず清談の性格について考えてみたい。「清談」なるものについては、従来ともすれば、儒学を軽蔑したことに對する非難に加え、晋が江南へ迫りやられた責任まで問われて、清談亡国論ともいうべき汚名が着せられてきた。こうした論法を代表するのが顧炎武・趙翼の意見である。①

の要点は(一)清談は老莊の談であり、(二)道德的墮落傾向があり、(三)亡国の要因となったというにある。このような言わば伝統的清談觀に對し、一個の新しい見解を板野長八氏がかつて発表された。②氏によれば「清談とは文字通り清く正しい談であつて、本来儒教的に正しい論であつたが、思想の変化に応じて老莊仏教思想も含むようになった」という。この説は従来の清談＝老莊の談というイメージを打破る、画期的なものであつた。この考えを宇都宮清吉氏はうけつがれ、清談は本来、決して墮落傾向を持つものではなく、清談亡国論も根拠の無いことを説かれた。③両氏によつて伝統的な清談觀は一新された。しかし、後述のように清談という言葉の用例には様々な系譜に属するものが共存しているにもかかわらず、板野氏は清談という用例をすべて同一概念に属するものとされているので、ここに尚、疑問の余地が残されていると思う。

これら文化の相としての研究に對し、清談を歴史的発展の過程の中で把握、後漢末の清談の変化とみる学者は宮崎市定氏と唐長孺氏である。④宮崎氏は「九品官人法が制定され、選挙基準が変化したのに応じて、魏初を境に清談から

分離した一派が貴族化して清談が生れた」とされる。貴族社会の発展の過程と清談の推移とを関連づけて説かれる宮崎氏の巨視的視点は秀れたものであり、清談の歴史的意義を考へる時、貴族社会の発展という事実を抜きにしては到底考へることはできない。しかし、清議という政治性の強い活動が、清談という全く政治性を抜きた議論に、どのようにして変化したかという過程を具体的に知り得ない恨みを感じる。一方唐氏は「清談には常に人物評論という要素が含まれており、これは後漢末の清議が選挙基準の確立をめざして行った人物評論の変化発展したものである」とされる。清談が一貫して政治的任務を帯びていると唐氏は考えられる。確かに清談という言葉の用例を検討してみると、清議と同義のもの、人物論、政治談という意味を持つ用例も少なからず存在する。しかしながら同時に存在する政治性を持たない論理分析の場合——ここでは塵尾をふりながら清談が行われ、巧みな論理分析の技巧や、音声の美しさが競われる——の存在をどう把握すべきであろうか。唐氏の研究は清談を歴史的発展の相の面から理解しようとする新しい視点ではあるが、政治的清談と非政治的清談と

の関連についての把握方に、私はやや疑問を感じざるを得ない。

これらの諸説に対して強い反論が岡村繁氏から出された。<sup>⑤</sup>それによれば「清談は後漢時代より士大夫の家庭生活の中で行われていた消遣的談論が次第に発達してきたものであり、厳しい政治批判を掲げる清議とは別の系譜に属するものである。従って『清』の概念も、清く正しいというよりは俗に対して清と区別したに過ぎない」とされる。この説は清談の行われる具体的な場所の追求を通じて、実態的にその淵源が求められており、貴重な指摘だと思ふ。この方法によって、ともすれば清談という言葉の共通性や、そこに参加する人々の政治的行動と結びつけて理解しがちであった清談が、意外にも全く政治性を持たない談論であることが明らかにされた。私は岡村氏のとられた実態的研究法の中にこそ、従来の研究において残されて来たいくつかの疑問に答える鍵が含まれていると思ふ。従って本論は清談を「本質的に政治性を持たない消遣的談論である」という定義に基づいて論を進めていきたい。

さて、このような性格を持つ清談がなぜ魏晋時代に盛行

し、清談亡国の汚名が与えられる程の政治的・社会的影響  
力を持つことになったのだろうか。この疑問に答えるため  
には、清談を再び歴史の推移の中に置き直し、現実の社会  
の中でいかなる機能を果していたかを究明せねばならない。  
その過程で私が特に注目したいのは、清談に加わる人々の  
交遊関係及び私生活のあり方である。このような視点を設  
定するのは、清談という文化形態が、人と人との私的交友  
生活の中で織りなされる人間関係によって生れ、清談の持  
つ社会的機能はその私的交友関係を通して發揮されるもの  
だと思ふからである。

## 二 竹林清談の時期と場所

竹林七賢に数えられる人々の本貫・最終官職・生卒年を  
『晋書』本伝にみると次のようである。

姓名	本貫	最終官職	生	卒	年
嵇康	譙国銜	中散大夫(嘉平八年頃)	三三〇	三六三	四〇歳
阮籍	陳留尉氏	步兵校尉(魏末)	三〇〇	三三三	五四歳
山濤	河内懷	司徒(太康三年)	三〇五	三三三	七九歳
王戎	琅邪臨沂	司徒(元康七年)	三三〇	三三三	七二歳
向秀	河内懷	散騎常侍(西晋)	未詳		

阮咸 陳留尉氏 始平太守(咸寧年間) 未詳 以寿終  
劉伶 沛国 建威參軍(西晋) 未詳 泰始中(三  
三〇) 猶在

これらの人々の間に、言われているような交友関係があつ  
たとすれば、それは、いつ、どこに於いてのことであつた  
だろうか。竹林清談の場所と時期については既に福永光司  
氏の秀れた研究があるので、以下それに従つて竹林清談の  
行われた場所と時期を記述してみよう。

嵇康は、曹操の孫の沛王林の女と結婚したと推定される  
正始八・九年頃(二四七・八)<sup>⑦</sup>から間もなく河内の山陽へ寓  
居したと考えられる。その近くには向秀と吕安が住んでお  
り、又あまり遠くない河内の懷には、正始八年(二四七)よ  
り山濤が官を棄てて隠棲していた。<sup>⑧</sup>山濤と向秀とは旧知の  
間であつたので、早くても二四七年頃より嵇康・向秀・山  
濤及び七賢には数えられていないが、吕安も含めて、まず  
山陽に交友グループが成立したと考えられる。阮籍は正始  
九年(二四八)都の尚書郎の官舎に王渾を訪ねた時、子の王  
戎と知りあつた。<sup>⑩</sup>その時阮籍は四十才、王戎は十五才に過  
ぎなかつた。嵇康と阮籍とが知りあつたのは、嘉平年間(二  
四九—二五三)のことと思われる。王戎と嵇康とは二十年間

の交友があったこと、阮籍・王戎も間もなく竹林の清遊に加わるようになったと考えられる。阮咸・劉伶の場合には史料にみることはできないが、阮咸は阮籍の甥であることから、阮籍と前後して加わるようになったことが考えられ、劉伶も少し遅れて参加するようになったと考えられる。

『水経注』清水の条には、山陽の嵇康の旧居に後人が記念して七賢祠を建てていたと記されていることから、竹林清談は嵇康の家を中心に行われていたと考えられないでもないが、必ずしも一定してはいなかったであろう。メンバーについても所謂七賢だけではなく、嵇康との談論の記録されている呂安・公孫崇・阮侃・張遜・郭遐・趙至などもメンバーとして数えて差支えないと思われる。竹林清談は、これ以後大体甘露末年(二五九)まで、十年余り続いたとされている。

中央政界では、嘉平元年(二四九)司馬懿が政変を起し、曹爽を倒して実権を握ったが二年後司馬懿は死に、司馬師・司馬昭の兄弟が地位を継いだ。司馬師執政時代(二五一―二五五)に山濤は官界へ復帰した。嵇康は一時山陽を離れて河東へ移った。再び山陽に還ったのは景元元年(二六〇)

である。その二年後、嵇康は呂安と共に処刑された<sup>④</sup>。嵇康の死後、向秀は官界に出仕した。これは司馬昭執政の時代(二五五―二六五)のことであるので、遅くとも二六五年より前の出来事である。王戎は司馬昭の時代に相国掾となった。阮籍は既に司馬懿・司馬師両方の従事者となっていたので、隱遁生活をしてしたのは正始末年(二四八)前後の極く短期間にすぎないが、政治の実務には全く携わらない、気ままな生活を続けていた。劉伶も阮咸もほとんど用いらなかった。阮咸が政界入りしたのは、咸寧年間(二七五―二七九)になってからである。

諸賢の動静を総合してみると、二五一年から二五五年の間に山陽グループから山濤が去り、王戎も二五七年には去った。嵇康も一時河東へ去った。嵇康の復帰も束の間、二六二年の嵇康・呂安の刑死をもって竹林清談は完全に終わった。向秀はこれを機会に官界進出を図ったものと思われる。司馬氏のクーデターの前夜の緊張した空気の中で始まった竹林清談は、嵇康の刑死と山濤・王戎らの官界復帰の動きの中で次第に消滅していったのである。

福井文雅氏は、竹林七賢という交友グループの存在につ

いて疑問を持たれ、「南渡後にできた伝説であろう」と結論された<sup>④</sup>。氏の説のように、確かに『魏志』には竹林七賢という言葉がなく、それが具体的記述として現われはじめるのは東晋になってからである。その上、あまりにも整い過ぎた竹林七賢像には伝説化のきらいがないとは言えない。しかし、竹林七賢という言葉自体は後世のものだとしても、既に述べたように、山陽に於ける彼らの相互の交友関係の存在を史料によって確かめることは可能である。

そして私が特に「竹林七賢」にこだわる理由は、七賢の生活を追求することによって、七賢以外の人々をも含んだであろうこのグループ全体の性格を理解することが可能であると考えるからである。

### 三 竹林清談の時代的背景

竹林清談の始まったと思われる直後の嘉平元年(二四九)、司馬懿は、正始初年(二四〇)以来十年近く政權を握っていた曹爽らの一党を悉く誅滅して政治の実權を掌中に収めた。これより魏晋禪讓(二六五)に至るまでの十数年間は、司馬氏に対立する勢力が次々に誅滅されていく、恐怖に満ちた

時代であった。この魏晋交替期という特殊な一時期に行われたとされる竹林清談の性格を理解するために、まずこの時期における政界の動きに、今少し細かく目を向けてみたい。

竹林清談の行われていた頃、魏勢力一掃をめざす司馬氏によって排除されたり、司馬氏に反旗を翻えしたりした事件には次のようなものがある。

- (一) 曹爽・何晏らの一党誅滅(二四九年一月)
- (二) 大尉王淩・兗州刺史令狐愚(淩の外甥)廃立を図り、敗れて自殺(二五一年十一月)
- (三) 太常夏侯玄・中書令李豐・齊王芳の后父張緝ら、謀反を図り誅に伏す(二五四年二月)
- (四) 鎮北將軍許允、罪を受け死す(二五四年秋)
- (五) 齊王芳廃され河内に幽閉さる(二五四年九月)
- (六) 鎮東將軍母丘儉、揚州刺史文欽反す(二五五年正月)
- (七) 征東將軍諸葛誕反す(二五七年五月)
- (八) 高貴郷公殺害さる(二六〇年五月)

これらの諸事件はいわば魏晋対決の接点であるといえよう。それ故これらの諸事件の性格にはこの時点における政

界の動きを知る手がかりが含まれていると考えられる。

まず司馬氏の最初の攻撃を受けた曹爽政権の性格を考慮してみよう。曹爽は魏建国の際曹操を助けて活躍した曹真（曹操の族子）の子である。明帝に重んぜられて崩御の際には司馬懿と共に遺詔を受け、胥王芳が即位すると司馬懿を太傅に祭り上げて自ら政治の実権を掌握した。以後司馬懿のクーデター（二四九）までの約十年間曹爽政権が続く。曹爽の許では何晏をはじめ、鄧颺・李勝・丁謐・畢軌・桓範らの人々が腹心に任ぜられて要職を占めていた。これらの人々のうち何晏は後漢末の大將軍何進の孫に当るが、母が後に曹操の夫人になったため魏の宮廷内で曹操の実子のように愛されて育ち、曹操の女、金郷公主を妻とした人である。また丁謐は曹氏と同郷（沛国）出身であって、父の丁斐は曹操の起兵の時から旧臣で個人的に目をかけられた。謐と曹爽とは昔なじみの間柄であった。畢軌の父も建安年間に典農校尉をつとめた旧臣で軌も曹爽と旧知の間柄であり、その子は公主に尚した。李勝も曹爽の若い頃からの知り合いであった。また桓範は曹爽から郷里の「老宿」（沛国譙の人、建安末年より歴仕）として厚遇されていた。このよ

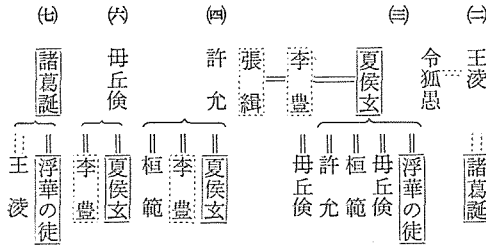
うに曹爽政権に加わる主要人物の大部分は魏の帝室とは姻戚関係や親密な縁故関係を持ち、曹爽と個人的な交友関係を結んでいた。このような人々が構成される曹爽政権が曹氏一族の利益を守って司馬氏と対抗する立場に立つてであろうことは容易に想像される所である。

しかし、この人々には曹氏派という以外にもう一つの共通した特色がある。即ち彼らの大部分は既に明帝太和四年（二三〇）に「浮華の徒」として禁錮されたことがあり、当時彼らは四聰八達なる交友グループを作っていた。

是の時、当世の俊士散騎常侍夏侯玄、尚書諸葛誕、鄧颺の徒、共に相題表し、玄ら四人を四聰となし、誕ら八人を八達となす。中書監劉放の子熙、孫資の子密、吏部尚書衛臻の子烈の三人、威な比ぶるに及ばざるも、父勢位に居るをもつて、これを容れて三子となす。凡そ十五人。帝、浮華を構長するをもつて皆官を免じ廢錮す（『魏志』二八諸葛誕伝注引世語）。

明帝のこの禁止令で斥けられた者には、夏侯玄・諸葛誕・鄧颺・劉熙・孫密・衛臻の他に、何晏・李勝・丁謐・畢軌などがあげられる。これら「浮華の徒」で構成された曹爽政権は恐らく「浮華」的性格を備えていたに違いない。

曹爽打倒に始まる前掲の諸事件の關係者が多く魏帝室と密接な關係をもち、相互の間に親密な交友關係や姻戚關係があることを福永氏が指摘されているが、この交友關係の中核をなすのがまた浮華の徒であったことを看過することはできない。前掲諸事件のうち(四)及び(八)は魏帝室に対する直接の干渉であるからその性格は自から明らかと思われるので考慮の外に置くとして、今(二)(三)(四)(六)(七)の事件の關係者について、その關係を表示すると次のようになる。



(一)は友善、(二)は姻戚關係、(三)は浮華の徒、(四)は魏帝室との姻戚關係を表わす

これらの人々のうち夏侯玄は魏の宗室に準ずる夏侯氏の夏侯尚の子で曹爽の姑子に当る。張縉の女は齊王芳の皇后であり、李豐の子は公主を妻としている。また王凌、母丘儉の父興は曹操時代からの旧臣、文欽は曹爽と同邑であるなど、この人々の交友關係が曹氏に同情を寄せる立場に立っていたことは否めない。しかし、諸事件の關係者がすべて「浮華の徒」又はそれと親密な關係を持っていたことは、単なる偶然とは考えられない。司馬氏の鋒先は曹氏の勢力に向けられたばかりではなく、「浮華」勢力にも向けられていたと考えざるを得ない。それでは司馬氏から執拗に追求された「浮華勢力」とはいかなる性格のものであろうか。「浮華」についての最も簡明な解説は、先に述べた浮華禁止の詔の発せられる動機となった司徒董昭の上疏である。董昭は次のように述べている。

竊かに当今の年少を見るに、復た学問をもつて本専となさず、更に交遊をもつて業となす。国士は孝悌清修をもつて首となさず、乃ち勢に趨り利に遊ぶをもつて先となし、党を合し羣を連ね、互に相褒歎し、毀譽をもつて罰戮となし、党譽をもつて爵賞となし、己に付する者はこれを歎むるに言を盈た、



し、付きざる者は則ちために瑕癥を作す(『魏志』十四董昭伝)。この上疏より浮かびあがる「浮華の徒」の生き方の特色は

- (一) 交友を盛んに行い、
- (二) 勢力・利益をめざして党派を結成し、
- (三) 人物評論を行う

ものであって、これは学問を修め、孝悌の実践を通じて生き方を見出す伝統的な士大夫の生活意見とは正反対のものである。先に述べた四聰八達なるグループは実はこのような交友活動の中で行われる人物評論を通じて生れた党派であって、そこで与えられる評価には何らかの意味で「罰戮」「爵賞」という言葉で表現し得る権威があったとみることが出来る。

浮華の徒の一人、夏侯玄と親しく、彼と運命を共にした李豊の活動などは正しく「浮華」行為の一例といえよう。

李豊……年十七八、鄴下に在りて名清白たり。人物を識別すれば、海内翕然として注意せざるなし(『魏志』九夏侯玄伝注引魏略)。

魏略は尚、李豊の名声が呉にまで及んでいたことを記している。この事実から「浮華」グループの権威は魏という国

家の枠を超えた全中国的なひろがりを持っていたことがわかる。また鄧颺について

鄧颺字玄茂、鄧禹の後也。少くして士名を京師に得たり(『魏志』九曹爽伝注引魏略)。

とあるように交友社交界から与えられる評価は、名士としての地位を保証する「士名」という権威をもっていた。このような人物評論の評価基準は伝統的な道徳を重視する士大夫のあり方とは異り、才能の重んぜられる傾向が強い。

丁謐、少きより肯えて交遊せず。但、博く書伝を觀る。人と為り沈毅にして頗る才略あり(『魏志』九曹爽伝注引魏略)。

畢軌、才能をもつて少きより声名あり(同前)。

李勝、少くして京師に遊ぶ。雅より才智あり(同前)。

是の時、何晏才辯をもつて貴戚の間に頭われ、鄧颺交通を好み、徒党を合し、名を閭閻に響ぎ、夏侯玄貴臣の子なるをもつて少きより重名あり(『世說新語』識鑒篇注引傅子)。

ここでは才能主義を重んずる「浮華」的世論を形成するのは「貴戚」、換言すれば当時の貴族社交界であったことが知られる。事実、何晏・夏侯玄・曹爽はいずれも魏において貴戚の名に価する家柄であったし、蜀の諸葛亮、呉の諸

葛瑾を従兄にもつ諸葛誕、子が公主に尚した李豊、畢軌も加えた「浮華」グループこそ、この時期における貴族交友社交界に他ならないであろう。また「浮華」グループの底辺を支える場として避役の子弟で学生数が急増加した太学があったことも見逃すことができない。当時太学では学生が学力が低下し、「浮虚を求める者各々競逐し」「浮華交遊」の風潮が盛んであった。<sup>②</sup>

交友活動と人物評論の盛行を伴う「浮華」の風潮は決して太和年間に突然始まったものではなく、既に後漢から一般的な風潮でもあった。増淵龍夫氏が指摘されるように党錮事件こそ「浮華」の風潮に対する弾圧の一つの場合であったのだ。清議及び後漢の人物評論の盛行と「浮華」の風潮の関係については別の機会に考えることにしたいが、但、魏の太祖曹操が交友社交界での評価を出世の手がかりとして利用した<sup>③</sup>ことから、このような風潮と魏の伝統が密接なつながりを持っていると思われることを指摘しておきたい。

「浮華」の徒の人物評論が才能を重んずる傾向にあることは既に指摘した。また福永氏は何晏の思想に賢才主義があることを嘗て指摘されたが、賢才主義は門閥主義に對

立する理念であり、これはまた、曹操以来の魏の伝統的な政策の一つでもあった。<sup>④</sup>

「浮華の徒」がいかなる政治理念を持っていたかを知るに足る史料として、『魏志』に夏侯玄が司馬懿に答えた中正制度をめぐる議論がみえていいる。<sup>⑤</sup>この中で夏侯玄は、権門が勢力を得るようになることを理由に、中正制度に反対する意見を述べている。司馬懿は嘉平元年(二四九)の政変の前後に州大中正の制度を施行しているが、宮崎市定氏によれば、これは九品官人法の門閥化を促進する制度であった。<sup>⑥</sup>これより夏侯玄は反門閥主義、司馬懿は門閥主義という両者の争点を見出すことができる。このような事実から考えると、浮華の徒の立場は魏初以来の賢才主義、反門閥主義の伝統を守る立場であり、司馬氏の貴族主義を志向する立場とは根本的に相容れない性格のものであったと考えてよいであろう。

竹林清談の時代は司馬氏にとって曹氏に對決すると同時に、「浮華」勢力との對決の時期であった。「浮華」的風潮は、本来権力とは無関係な民間的風潮であるが、この風潮は魏の伝統の中に生き、魏の貴族社会にリードされて来

たため、魏の滅亡と離れ難く結びついて現われたのである。

#### 四 竹林七賢の交友関係とその生活

清談で結ばれた竹林諸賢の交遊グループは、なぜ魏末の一時期に存在したのか。多くの面であまりにも違いすぎる諸賢たちの間に、どうして厚い友情と信頼が生まれ得たのであろうか。これらの疑問を解くためには諸賢の交友関係、立場、生活がどのようなものであったかを明らかにし、彼らの生涯の中で竹林清談の占める意義を検討してみなければならぬ。

#### 嵇康字叔夜

祖先は会稽の出身。早く父を失う。博学であるが特に老荘を好む。琴が巧みで、養生術を信じて実行していた。その性格は極めて慎しみ深く、王戎は二十年間の交際中一度も彼が怒ったところを見たことがないという。魏曹操の孫の沛王林の女と結婚、中散大夫に拝せられた。その後山陽に移り竹林清談を行ったが、刑死するに至ったことは前述の通りである。

嵇康の生活条件の中で先ず問題となるのは、曹氏と姻戚

関係にあることである。これは魏晋交替という厳しい現実の中で、司馬氏に対する批判の気持を強める要素として働いたと思われるが、彼の司馬氏に反撥する立場は、その交友関係を考えると一層明らかとなる。先に掲げた諸事件のうち(四)の許允の妻は嵇康と親交のあった阮侃<sup>⑤</sup>の女であった。また(六)事件の母丘儉の反乱の時、嵇康は兵を挙げてこれに応じようとした。

母丘儉反するや、康、力あり。且に兵を起して之に応ぜんと欲し、以つて山濤に問う。濤曰く「不可」と。儉亦た已に敗る『魏志』二一王粲伝注引世語。

母丘儉反乱が「浮華勢力」の反抗運動の一つであることは既に述べたが、この乱にさいし、嵇康が積極的に参加する意図を示したことは、彼と母丘儉との交友の深さ、ひいては「浮華」グループとのつながりをも意味するものである。またこの史料は、何らかの形で嵇康が武力を動員できる実力を保持していたことも暗示している。『世説新語』には、嵇康が刑場におもむく時太学生三千人が助命を嘆願し、彼を師とすることを請うた<sup>⑥</sup>という記述があり、その注には王隱『晋書』を引いて、「康の獄に下るや、太学生數

千人之を請う。時に豪俊皆康に随つて獄に入<sup>⑧</sup>ったといっていることから、嵇康が太学生の絶大な支持を得ていたことと、当時の名士(豪俊)たちと強い絆で結ばれていたことがわかる。

『魏志』は嵇康の人となりを次のように述べている。

時に又譙郡の嵇康あり。文辭壯麗、老莊を言うを好み、任俠を尚奇す。景元中に至り、事に坐して誅さる(『魏志』二一)

王粲伝)。

陳寿の書いたこの短い伝記は、文人・老莊家としての面のみが強調されるようになる以前の嵇康像を伝えたものとして理解すべきである。ここに「任俠を尚奇す」とあるのが注目される。刑死の際、助命を請うた三千人の太学生の存在、彼と強い絆で結ばれていた豪俊の存在、また彼が武力さえ動員し得る勢力を備えていたことを併せ考えるとき、そこには嵇康を中心にして強い精神的紐帯で結ばれた、陰然たる勢力を持つ人間集団を想定することができる。これこそ司馬氏にとって攻撃に備する「浮華」勢力に他ならぬいのではないだろうか。増淵龍夫氏は、任俠とは民間秩序を構成する原理であるとされる<sup>⑨</sup>。任俠という言葉がこのよ

うな意味を持つとすれば、陳寿が任俠と表現したものは嵇康のこの側面についてであろう。

既に述べたように、「浮華勢力」は反司馬の立場をとるものであった。従つて嵇康の持つこのような勢力は、司馬氏にとっては脅威と映つたに違いない。鍾会が嵇康を除くことを進言して次のように言っているのも、決して誇張ではないであろう。

嵇康は臥龍なり。起すべからず。公(司馬昭)天下を憂うる

勿れ。願つて康を以つて慮となさんのみ(『晋書』四九嵇康伝)。

何晏に次いで夏侯玄・李豊などの「浮華」勢力に対して、司馬氏の手が次々と伸びてくるのを見ると、嵇康は強い不安と恐れを懐くようになったと想像される。自分にとって不利に展開しつつある政治情勢の中で、隠棲生活に徹することを願いながらも、嵇康は最後の試みをせずにはいらなかった。竹林時代にも、ある時は母丘儉の乱をめぐる動き、またある時は敵の追求を逃れるために河東へ移住せざるを得ない破目に追いこまれた<sup>⑩</sup>。これらはいずれも彼が何らかの形で行った反抗運動の結果とみられよう。遂には政治的野心を捨て、「山巨源に与える絶交書」<sup>⑪</sup>に託して、

官界との訣別を宣言したのは刑死に遇う前年のことであった。この中には「湯・武を非とし、周・孔を薄しとす」という激しい言葉さえ見ることが出来る。官界に対して放った悪罵の間に、どうしようもない自己の宿命的な立場を貫こうとする最後の抵抗の響きが読みとれよう。

嵇康はこのような激しい言動を表明する反面、その性格は慎しみ深く、喜怒哀楽を表わすことはなかった。しかし嵇康の家誠『嵇康集』を読むと、その慎み深さは生来のものというよりは、細心の努力で築き上げた性格であるように思われる。そこには、友人との交際の仕方、上官に対する接し方、酒宴でのエチケットに至るまで、決して人に恨まれたり争いにまきこまれたりしないよう戒める言葉であふれている。蓋し嵇康が常に身に迫まる危険の中で守った座右の銘であろう。嵇康の山陽での隠棲生活は、いつ身にふりかかるか判らない災難を逃れるための手段でもあったと考えねばならない。

嵇康は秀れた理論家であって、多くの論を残している。中でも「声無哀楽論」、「養生論」などは後に清談の論題として重んぜられた。このように竹林清談の指導者としてば

かりではなく、清談の発達に嵇康の果たした役割は大きい。嵇康における清談は決して世俗との絆を断った生活の中で行われたのではなかった。しかし清談は、嵇康の政治的立場に直接にはかかわりない文人としての創作活動の一端なのである。

#### 阮籍字嗣宗

父の阮瑀は建安七子の一人。籍の性格は傲然不羈だが喜怒の表情を現わすことはなかった。酒を愛し、老莊を好む曹爽執政時代（二四〇—二四九）の末にその辟召を断って田里に退いた。司馬氏が勢力を得ると、大司馬從事中郎、散騎常侍を歴任し、後、歩兵校尉の倉に酒があると聞いて歩兵校尉にしてもらったが、常に泥酔して政務に携わらなかった。

阮籍の生き方を最も印象づけているのは彼の任誕行為である。喪に服しながら平然と酒肉を食らうなどという大胆な行為を敢えて行い、あらゆる道徳基準を破壊しようとしているかに見える任誕行為にも、しかしながら一つの明確な規律がある。任誕行為には決して現実社会に対する活動も批判も見られない。阮籍の生涯にはこのような政治世界

からの退避という原則が一貫している。

晉文王(司馬昭)称すらく、「阮嗣宗は至慎なり。之と云う毎に、言は皆玄遠にして、未だ嘗つて人物を感否せず」と

〔世説新語〕徳行篇。

玄遠とは超俗の談であつて、政治世界とかかわりを持つ発言の拒否を意味する。また人物感否とは、既に見たように秀れて政治的活動を伴う「浮華」活動の一端であつた。即ち阮籍の慎しみ深さは徹底した「政治世界からの退避」と換言することができる。

このような生き方を貫いた阮籍も、元々政治的野心をもつていなかったわけではない。

籍、本より濟世の志あるも、風ま魏晋の際、天下多故にして、名士の全きを有つ者少し。籍、これより世事に与らず、遂に酣飲を常となす〔晋書〕四九阮籍伝。

父の阮瑀が建安七子の一人として曹操・曹丕父子と親しく交っていたことは、阮籍の心に魏に対する信頼の気持を抱かせたであろう。「濟世の志」とはあるいはそのようなものであつたかも知れない。しかし、阮籍はそのような問題に全く触れようとはしなかった。阮籍の政治無視の態度は、

実は「濟世の志」を諦めた彼が意志の力で築き上げた生き方であつた。次に掲げる逸話は、阮籍の生き方が意志的に構成されたものであつたことを示すものといえよう。

阮渾(阮籍の子)長成し、風氣韻度父に似、亦達を作さんと

欲す。歩兵(阮籍)曰く「仲容(阮咸)已に之に預る。卿復た爾を得ず〔世説新語〕任誕篇。

注に引用された戴逵の「竹林七賢論」はこの事について「籍の渾を抑えるは、蓋し渾の未だ己の達を為す所以を識らざればなり」と解説しているのは正論であろう。しかし同時に、自分の人生を振り返りながら、任達行為は強い意志の力で統制するのでなければ、無意味なエピソードに過ぎなくなるといふことを戒める言葉ではないだろうか。

阮籍と切り離せないイメージを成している過度の飲酒も、しばしば政治世界からの退避の手段として用いられた。鍾会があわよくば阮籍を罪に陥れようとして時事問題を尋ねた時、泥酔して、その問いに答えることによつて危険を招くことを免れた。<sup>④</sup>司馬昭が婚姻関係を結ぶことを望んだ時、阮籍は六十日間酔い続けて遂に言い出す機会を与えなかつた。<sup>⑤</sup>彼は泥酔していても決して理性を失うことはな

い。司馬昭に与える勸進文を書くように依頼された時、二日酔であったにかかわらず、忽ち書き上げ、素晴らしい出来映えであった。<sup>④</sup> 阮籍にとって飲酒は、避け難い政治世界との対決をはぐらかす手段であったのだ。

政治世界との断絶を願う阮籍も、一旦官職が与えられれば敢えて拒もうとしなかったし、司馬氏父子とは三代に亘って親しい交友関係を結んでいた。但、官職の実務に携わらず、政治の話題に一切関与しないことによって政治世界との実質的な断絶を図ったのである。阮籍の生き方はあくまでも政治世界への批判ではなく、そこからの退避であつた。ここに、「山巨源に与える絶交書」を書き、或いは兵を起して司馬氏と対決しようとさえした嵇康と全く対照的な生き方が見られる。

政治世界に対する時の卑屈なまでの慎しみ深さに反し、任誕行為を行う阮籍には打って変わった大胆さがある。彼の著した「大人先生伝」<sup>⑤</sup>では、礼俗に従う君子を禪に巢食う蟲に譬えたり、礼俗の土を白眼で見、方外の土を青眼で見ると、任誕行為の鋒先は既成の俗的秩序に向けられている。古来から犯すことの許されなかった葬礼さえ批判の対

象となつた。

阮步兵(籍)母を喪う。裴令公(楷)往きて之を弔す。阮、方に酔いて散髪して牀に坐し、箕踞して哭さず。裴至り、席を下つて地に哭す。弔訇畢りて便ち去る。或る人裴に問う「凡そ弔するは、主人哭して客乃ち礼を為す。阮既に哭さざるに、君何すれぞ哭を為す。」裴曰く「阮は方外の人、故に礼制を崇ばず。我輩は俗中の人、故に儀軌を以つて自ら居る」と。時人歎じて兩つながら其の中を得たりとなす(『世說新語』任誕篇)。

裴楷の、礼の作法を通じて哀悼の意を示す生活の仕方は、言うまでもなく伝統的な礼教主義を代表する立場である。この俗中の世界に対置される方外の世界は、孔子的立場に對立する莊子の思想に基づくものであつて、この立場は宇都宮氏も指摘されているように本質的に非政治的性格を持つものであつた。<sup>⑥</sup> 任誕行為は、確かに現実の秩序を批判するものであつたが、その対象は道德の世界に限られ、決して政治批判という形をとらない。ここに阮籍の任誕行為のルールがある。

方外の世界——それはあくまでも実在世界の外、人間の

精神の中に設定された道德世界に過ぎず、方外の世界と俗中の世界との間には現実には何の利害関係も生じない。従ってその関係は一方が他方に節を曲げておもねるといふ陰微な形ではなく「両つながら中を得たり」といふ健康な関係なのであった。阮籍にとって方外の世界こそは、俗を超越した、より高い次元に属する誇り得る世界であった。

竹林清談の政治世界から一時的にでも隔離された状況は、このような生き方を選んだ阮籍には理想的な方外的生活の実現であったに違いないと思われる。

#### 山濤字巨源

早く父を失い貧しかった。老莊思想を好み、後、阮籍・嵇康らと竹林清談を行った。官界に入ったのは遅く、四十才の時孝廉に挙げられてからであるが、曹爽の誅される二年程前に危険を感じて身を隠した。司馬懿の妻は山氏出の女性を母としていて、山濤とは親類関係にあるので、山濤は幼い頃より司馬懿に知られてその才能を認められていた。こういう縁故を頼って司馬師輔時代には秀才に挙げられて仕官した。魏晉禪讓の際には魏の陳留王(魏最後の皇帝)を護送する役をつとめ、爵を新沓伯に進められた。西晋の始

め、権臣の怒りをもって一時冀州刺史に出されるが、再び中央に帰って侍中(二七二)、尚書僕射(二七六)を歴任し、選挙の職に十余年あった後、司徒(二八二)となったがその翌年没した。

山濤が竹林時代の中断期を経て政界に復帰したのは、早くても四十五才以後のことであるが、司馬氏とは姻戚関係にあったので山濤のその後の出世は急テンポであった。山氏は決して大族ではない。司馬懿は青年時代の山濤の才を賞め、その宗人に「卿が小族那ぞ此の快人を得るや」と戯れたという。司馬氏と姻戚関係を持つ山氏は文字通りの小族ではないとしても、決して大族ではない。河内の地方豪族の一つであったと考えて良いであろう。

山濤は曹爽政権の末期に危険を感じて官を捨てており、曹氏にはむしろ批判的ではなかったかと思われる。また司馬懿とは旧知の間柄でもあったので、新興の司馬氏により大きな期待をかけていたことであろう。政界が落ち着きを取り戻すや、いち早く司馬氏の側について禪讓の際その手足となって活躍したのも、山濤にとって、一族の縁者を盛り立てるといふ自然な気持から出た行為であったのだろ



う。

山濤は、優れた政治的才能を持っており、禪讓をめぐる緊張の中で充分にその任務を果たし、冀州刺史時代にも大いに治績を挙げることができた。しかし一旦中央政界へ戻ってからは、極力自己の意志を明確にしないで皇帝の意に従い、遺漏のないように心がけるといふ用心深さを示した。魏末、鍾会と裴楷とが権を争っている時も、山濤は両者と親しくしていながらも常に中立を保っていた。また世間一般の好ましくない風潮に対しても決して正面から対決する態度をとらなかつた。

初め、陳郡の袁毅……公卿に賂遺し、以つて虚譽を求む。亦濤に絲百斤を遺る。濤、時に異るを欲せず、受けて閣上に藏す。後、毅の事露れ、檻車もて廷尉に送らる。凡そ受くるところの賂、皆推検せらる。濤、乃ち絲を取りて吏に付す。

積年の塵埃にも封印初の如し（『晋書』四二山濤伝）。

この逸話は山濤が「時に異るを欲せず」——世間の風潮には逆らいたくない——と同時に、受け取った賂に手をつけないことによつて、申し開きの余地を残す消極的方法で正義を貫こうとする、彼独特の生き方を示すものである。

七十五才の高齢に至る永い官人生活を成功裏に終えることができたのは、時には機敏に政治力を揮い、時には注意深く自己の主張を隠すという、時宜に応じたその使い分けの巧みに負う所が大きい。

小族の出身で曹氏時代には不遇であつた山濤には、所謂名士との交友はなく、魏晋交替の波にもまれて苦しんだ嵇康・阮籍とは政治的立場も自ら別のものがある。山濤の生涯に於いて竹林時代は、転覆しそうな危機を孕んだ曹爽政権を離れ、司馬氏の政権の安定するのを待つ時期であつた。司馬氏の政権下で官人としての将来が約束されている山濤にとつて、清談三昧にふける竹林時代は決して陰鬱な毎日ではなかつた筈である。彼にとつて竹林清談は厭厭的隠遁ではなく、政治の世界から一定の距離をおいて官界復帰を待つ間の、一時的な退避生活であつたと言えよう。このように考えると、西晋時代に入つてからの山濤の政治家としての不即不離な態度も、官界との間に常に多少の距離をおくことをねらつたもので、竹林時代の一時的退避と本質的に異なるものを見出すことができる。

西晋時代の清談界は、王・裴二家のサロンを中心に行わ

れた。王衍・楽広らが談宗として活躍する時期である。山濤も清談の先輩として清談界へ出入りしていた。そもそも王衍の才能を最初に発見したのが山濤であった。<sup>⑤</sup> 西晋の清談界では山濤の口から竹林時代の思い出話が語られたであろう。就中「声無哀楽論」など数々の優れた論を残しながら、不幸な最後を遂げた嵇康の事などが話題に上ることが多かったと思われる。山陽の片田舎で行われた竹林清談が非常に伝説化された形で称揚されるようになるには、誰かその宣伝者がなくてはならない。七賢のうち、西晋の清談界で活躍した山濤と王戎の二人がその宣伝者であると私は考える。山濤は、嵇康の孤児を後に晋武帝に推挙したり、政治的には無能な阮咸を推薦するなど、竹林時代の仲間に対する深い思いやりをししばしば見せている。これは竹林時代への回顧でもあり、それを称揚しようとする心の現われでもあろう。

王戎字濬冲

琅邪の王氏に属する王戎は才能豊かな貴公子として名高く、幼い頃から明晰な頭脳を持つ神童ぶりを伝える逸話が多い。十五才の時、阮籍と意気投合して竹林清談に加わっ

たが、若い王戎には俗情を抜き去ることは難しかった。

嵇・阮・山・劉、竹林にありて酣飲す。王戎後れて往く。

歩兵(阮籍)曰く「俗物已に復た来りて人の意を敗る」と。

王笑いて曰く「卿輩の意、亦復た敗るべきや」と(『世說新語』)

排調(嵇)。

この逸話は和やかな機智に富んだ応酬の中にも竹林清談が俗情の排除、即ち超俗(方外)世界の設定を前提としていることを示している。しかし、ためらうことなく官界進出を図った王戎のその後の行動から考えて、竹林清談の時期が彼にとって政治世界へ進出するための、形勢待ちという機能を果たしていたことも否定できない。

琅邪王氏に属する王戎には輝かしい出世コースが約束されされており、七十二才で没する迄、順調な官人生活を続け得た。王戎は、特別の取柄はないが一応の務めだけは果すというタイプで、官人としてのモラルに欠けているようにさえ見える。弾劾されれば権勢者に頼って免かれ、身に危険がせまれば剛からでも逃げ出して禍を避けた。特に諸王の動きが活潑化し、晋室が乱れ始めると「蘆白玉の人となりを慕い、時と興に舒卷する」のみであって、選職にあ

つては未だかつて「寒素を進め虚名を退けることなく、戸調門選するのみ」であつた。こういう王戎の態度はしばしば「譎詐多端<sup>㉔</sup>」と評されもしたが、戴逵は次のように評価した。

王戎は危乱の際に晦黙し、憂禍を免るるを獲たり。既に明にして且つ哲、是に於いてある也（『世說新語』儉嗇篇注引戴逵七賢論）。

一見官人として無節操にみえる王戎の行動は、常に明哲保身という一貫した方針によって貫かれていた。

王戎の性格のもう一つの特色は徹底した吝嗇である。彼の所有する邸宅や僮牧、膏田、水碓の類は、洛陽近辺では誰よりも多く、証文や書類の整理に忙しいので、彼は毎晩妻と共に燈下でそろばんをははいていた。このような莊園経営の様子は、当時の貴族の経済活動を知る手掛りとなり興味深い。王戎は経済人として徹底した計算高さを持つていたが、それはあくまでも経営上の利害に關してのみであつて、金銭そのものに執着を持っていたのではなかつた。

王戎の父渾、令名あり。官涼州刺史に至る。渾薨するや、歷する所の九部の義故、其の徳惠を懐い、相率いて賻を致す

こと数百万なるも、戎悉く受けず（『世說新語』徳行篇）。

この逸話の中に王戎の高い徳性と清廉な人柄とを見ることができる。彼は政治家としては時流に附かず離れずの態度で保身を図り、経済人としては徹底した営利主義を貫徹するという人間であつたが、人柄の面では、常に厚い誠心と高い徳性を備えた士大夫であつた。このような人柄の王戎にとつて、竹林時代は官界進出を図る情勢待ちの時期でありながらも、思想を同じくする者同志の語らいの場として、精神的には満ち足りた時期であつたにちがいないと想像されるのである。

王戎は、西晋時代の清談界の旗頭である王衍の従兄であるので、王氏のサロンに先輩として出入し、見事な清談を披露していた。

諸名士共に洛水に至りて戯る。還りて楽令（楽広）王夷甫に問いて曰く「今日の戯、樂しかりしか」と。王曰く「裴僕射（裴頠）善く名理を談じ、混混として雅致あり。張茂先（張華）史漢を論じ、靡靡として聴く可し。我、王安豊（王戎）と延陵、子房を説く。亦超超として玄著なり」と（『世說新語』言語篇）。

こういう情景が西晋清談界の日常の風景であったと思われるが、こうした談論の中で、王戎もまた竹林時代を懐しみ、思い出話を名士達に聞かせたことであろう。

#### 向秀字子期

向秀は山濤と同郷出身であつて、若い頃よりその名を山濤に知られていた。『嵇康集』には嵇康と交した「養生論」をめぐる論争が載っており、嵇康と共に清談のリーダー格であつたと考えられる。世情が落ち着きを取り戻すや、隠棲生活をあつさり捨てて上洛した。

嵇中散(嵇康)既に誅せられるや、向子期(向秀)郡計に挙げられ入洛す。文王(司馬昭)引進して問いて曰く「君箕山の志を有つと聞く。何をもつて此にあるや」と。対えて曰く「巢・許は狷介の士、多く慕うに足らず」と。王大いに咨嗟す(『世説新語』言語篇)。

咄嗟の機智から出た答えとはいへ、竹林清談は、外界の情勢が変化すれば、たちまち狷介の士のたわごとときめつけられる性格のものであつた。向秀にあつては官界に入ること何らの抵抗も感じてはいない。竹林清談は巢父・許由の場合のような、社会体制に対する反抗運動の表現とし

ての隠遁生活ではなかつたのである。竹林清談という隠遁的形態をとることの便宜的性格をよく示す逸話である。

西晋時代、官人生活に入つてからの向秀は「朝にあつて職に任ぜず、容迹するのみであつた」<sup>⑥</sup>。山濤や王戎がそうであつたように。自分自身は官界にありながらも、常に少し距離をおいた保身の態度を取り続けていたようである。ここにこの時代独特の官人としてのモラルをうかがうことができる。

#### 阮咸字仲容

阮咸は阮籍と同じく任誕行為を行つたが、両者の態度には大きな違いがみられる。阮籍の行為には反礼教という主義の実行を通じて、真の礼法を示そうとした理想が感じられる。即ち喪中に酒肉を食つても、それはより真心のこもつた喪礼であると評価された。しかし阮咸の行為には、伝統的秩序に対する挑戦はみられず、人の意表を故意につこうとする形式だけの模倣が多い。時には逸脱して社会の排撃を受けたことがある。

咸既に婢を追ひ、是において世議紛然たり。魏末より閭巷に沈淪し、晋咸寧中に逮び始めて王途に登る(『世説新語』任

任誕行為は伝統的礼法に対する攻撃ではあっても、本来そこには、それに代わる新しい意味の礼法の確立が無くてはならない。しかし既に阮咸において、本来の姿を失いつつある模倣者の姿を見出すことができる。西晋時代になるとこの種の人物が多く現われるに至った。王澄・謝鯤などの貴遊子弟のまわりに集ったグループが酒に耽り、裸で走りまわる状況が出て来るが、阮咸はこういうタイプの魁とみることができよう。

#### 劉伶字伯倫

性情がほしいままで、宇宙を狭しとし、常に酒に酔いつれていた人物である。奇抜な言動によって衆目をひく所謂任達者流にすぎない。

### 五 竹林清談の性格

以上述べてきたように、様々な立場を持つ竹林七賢達の生き方を見る時、そこに彼ら結びつける共通な場を見出すことは困難である。嵇康は「山巨源に与える絶交書」の中で山濤の性格について「堪えざる所無く、外には俗に殊

ならず、内には正しきを失わず、一世と其の波流を与にして悔吝生ぜざるのみ」と述べ、自らの性格と対照しながら「足下傍通、可多くして怪しむこと少し、吾直性狭中にして堪えざる所多し、偶々足下と相知るのみ」と語っている。また阮籍については「阮嗣宗、口に人の過を論ぜず。吾、毎に之を師とするも未だ能く及ぶ能わず。至性は人に過ぎ、物と傷るなく、唯飲酒過差なるのみ、礼法の士に繩ひもらるるに至りて、之を疾むこと讎の如きも、幸に大將軍（司馬昭）に頼りて之を保持するのみ、吾、嗣宗の賢に如かざるなり。」と述べてはいるが、これは明らかに自分の生き方が、山濤とも阮籍とも根本的に異っていることを言おうとするのに他ならない。王戎・向秀の生き方を山濤的と考え、阮咸・劉伶を阮籍型の変形とすれば、嵇康が鮮かに描き出した三つの生き方が竹林清談の実際の姿であったと言うことができよう。山濤に対して言った「偶々足下と相知るのみ」——偶然知り合いになったにすぎません——という言葉は、七賢のすべての交友に通ずるのではなからうか。しかしながら彼等の生涯の中で占める竹林時代の役割には一つの共通した働きがある。それは各人がこの時期に魏

晋交替の際の政治上の混乱から一時的に逃れるため、政界から退避を図っていたという事実である。山濤・王戎・向秀は、時期が到来すれば政界進出をしようとする野心を棄てはしなかったし、嵇康は竹林時代にも積極的に政治活動を行っていた。阮籍らの任誕者達も消極的な形をとりながらも官職を拒みはしなかった。竹林清談は形態は隱遁的であつても、この時期は政界からの退避の時期であつて、政治世界とのつながりを拒否しようとするものではなかつた。

ここに竹林清談の独特な政治世界とのつながりが見られる。このグループは諸賢個々の便宜に従つてむしろ自ずと形成されたものであるから、社会が安定し、個々の進むべき道がはっきりするにつれ、次第に分散消滅していかざるを得なかつた。但、ここで便宜という言葉を使うのは、このグループの成立の社会的条件に關してであつて清談の内容そのものまで便宜的であるというのではない。

清談は本来政治性を持たない消遣的談論であり、この場においては、いかに政治的見解が違つても、立場を超えた精神的絆を結ぶ可能性が存在する。七賢の間に伝えられているような厚い友情と信頼が生れ得たのは、清談のもつこ

の非政治的性格に根ざすものであつた。政治世界から一時的にもせよ離れている竹林時代の状況は、一層純粹に清談を樂しむ心境を準備するものであつたと思われる。このよ  
うな政治世界からの退避という状況の中で彼らの心を捉えた思想は老莊に基づく方外思想であつた<sup>⑧</sup>。超俗の境地を主張する方外思想は彼等の置かれていた状態を表現するのに真にふさわしいものといえよう。方外思想で結ばれた竹林清談は決して妥協的な談論ではなかつた筈である。

清談の場のある方には、竹林清談のように政治世界からの退避を図る場合と、正にそれと反対の交友社交界内での人物評論を通じて社会的勢力を形成して行く場合とがある。何晏を主宰者として、浮華の徒が中心となつた「正始の音」がその代表的な例である。この場合も清談の内容自体は後世の範とされるに足る水準の高い論理分析であつたが、ここでは同時に人物評論が行われ、ここで得た名声は士大夫にとつて有効な政界進出の手がかりとなつた。かくして清談の場は單なる談論の場を越えた政治的機能を帯びてくる。このように清談が人物評論と結びついて、政治勢力形成の一端を荷う働きを清談の「浮華性」と定義してみよう。こ

れとは対照をなして、人物評論をはじめ一切の政治的発言を排し、政治世界からの退避を図るあり方、この性格を清談の「韜晦性」と定義してみよう。同じ清談の場でありながら、「浮華性」が積極的に政治世界に働きかけようとするのに対し、韜晦性は政治世界からの退避を図りながら、消極的に政治活動を受容する方向を持ち、保身の態度につながるものであった。

清談界の推移をたどってみると、漢末から魏の「正始の音」に至る期間は、清談と人倫臧否とが結びついた浮華性の強調された場合が多く見られ、魏晋交替の過程で、魏と多くの関係を持つ「浮華」勢力が徹底的に排除されるや、韜晦性の典型ともいべき竹林清談が現われた。西晋に入ると再び浮華的清談が活潑となった。王衍のサロンでは盛んに清談が行われ「朝野翕然として之を一世の龍門と謂う。……後進の士、景慕放效せざるなく、選舉・登朝皆以って称首となし、矜高浮誕、遂に風俗となる」という有様であった。この状況は盛衰はあっても、ほぼ南朝の末まで続いたと言つてよい。しかし同じく「浮華」の様相を呈しているも、竹林清談の以前と以後とを比べて見る時、「浮華」の

あり方に大きな相異が見られる。所謂「浮華」の徒に見られた政治への強い関心は西晋の清談界には求めるべくもない。「一世の龍門」と仰がれた王衍でさえ「宰輔の重きに居ると雖も、経国を以って念と為さずして自全の計を思い。」<sup>⑧</sup>石勒に捕えられた時も言い訳をして罪を逃れることばかり考えていた。王衍においては政治的関心に代って強い保身への執念がうかがえる。一流貴族のサロンで行われる談論では、もはや賢才主義は行い得なくなった。こうして清談が人格の高下・賢愚を識別する機能を失った時、それは急速に遊戯化していった。阮籍にあっては特異な生命力を持つていた任誕行為も、政治的無関心を装う好個の形式として、奇をてらう愚行となつていかざるを得なかった。政治的関心を全く失い、賢才主義の働きを失い、保身の機能が強調された西晋以後の清談には「韜晦性」が色濃くなつて

いる。  
清談において、人物評論と結びついた「浮華性」の強調された場合、そこでの評価は広汎な拡がりを持つ或る種の権威を伴つた社会的世論を形成した。特定な人物を中心として形成されるため、党派の傾向を持ち易いこの世論が、

いわゆる「清議」なるものの重要な構成要素を成すものと思う。この場合、清談と清議とはいわば表裏の関係にある。

関係年表

西暦	年号	事件
245	正始 7 6	曹爽・何晏ら伏誅 司馬懿輔政
250	嘉平 9 8 7 6	王凌・令狐愚事件 司馬懿没、司馬師輔政
255	正元 5 4 3 2	李豐・夏侯玄・張緝事件 齊王芳廃され、高貴郷公即位 司馬懿没、司馬昭輔政 母丘儉・文欽反す
260	景元 4 3 2	高貴郷公廃され、陳留王即位 嵇康刑死
265	泰始 元	司馬昭没、晋武帝受禪

← 竹林時代 →

しかし清談の場合人物評論の機能を失う過程で、門閥社会の家格の上下が権威を現わすにつれ、「清議」の働きは次第に失われていったと考えられる。「浮華性」から「韜晦性」への変化はまた門閥化の過程と一致するものであった。竹林清談は正にその転換期の姿であったとみることができる。「浮華」

勢力との交友と竹林清談との間を徘徊した嵇康の生き方は「韜晦性」に徹しきれない浮華の徒の悩み抜く姿を見ることができ、方外世界の設定に成功した阮籍は、巧みに転換に成功した先駆者といえるであろう。政界にありながら、不即不離な態度を守り続けた山濤・王戎・向秀には保身に徹した士大夫の新しい生き方を見ることができ、阮咸・劉伶の任誕行為には、後のエビゴーン達を生れる萌芽が既に存している。竹林清談はこのように過渡期の要素を含みながらも、韜晦的清談の純粋な祖型となった。ここ以後の伝説化を生む要因があるといえよう。

- ① 顧炎武『日知録』十三「正始風俗」、趙翼『廿二史劄記』八「六朝清談之習」。
- ② 板野長八氏「清談の一解釈」、『史学雑誌』五〇―三。
- ③ 宇都宮清吉氏「世説新語の時代」、『東方学報』京都一〇―二、「漢代社会経済史研究」所収。
- ④ 宮崎市定氏「清談」、『史林』三〇―一、「アジア史研究第三」所収。唐長孺氏「清談與清議」、『魏晉南北朝史論叢』所収。
- ⑤ 岡村繁氏「清談の系譜とその意義」、『日本中国学会報』第十五集。
- ⑥ 福永光司氏「嵇康における自我の問題」、『東方学報』三二。
- ⑦ 『嵇康集』「与山巨源絶交書」に「女十三、男兒八才」とあることから逆算。福永氏前掲論文参照。
- ⑧ 『文選』十六 向子期(向秀)思旧賦序に「余与嵇康吕安、居止接近」



とある。

⑨ 『晋書』四三山濤伝。

⑩ 『晋書』四九向秀伝。

⑪ 『世説新語』德行篇注引晋陽秋、及び『晋書』四三王戎伝。

⑫ 『世説新語』によれば、嵇康が阮籍と知り合ったのは、籍の喪中のことであつて(簡傲篇注引晋書百官名)、それは何曾の司徒在職中(嘉

平年間)のことである(任誕篇)。

⑬ 『世説新語』德行篇。

⑭ 『晋書』嵇康伝。

⑮ 『世説新語』言語篇。

⑯ 福井文雅氏「竹林七賢についての一試論」『フイロソフイア』三七。

⑰ 『魏志』九曹爽伝及び同注引魏略による。

⑱ 『魏志』三明帝紀太和四年春二月「其浮華不務道本者、皆罷退之。

⑲ この部分の原文は「玄暉四人為四聰、誕備八人為八達」とあるが、「

暉」一備」の意味が不明なため、『資治通鑑』に従つて訓読した。

⑳ 『魏志』九曹爽伝及び同注引魏略、『魏志』二八諸葛誕伝及び同注

引世語による。

㉑ 福永光司氏前掲論文。下文の表は注四により作製。

㉒ 彼らの交友関係は次のようである。何晏と夏侯玄(『魏志』九曹爽

伝注引魏志春秋)。鄧騭と諸葛誕(『魏志』二八諸葛誕伝)。桓範と許允

(『世説新語』賢媛篇)。李豊と夏侯玄・張紹(『魏志』九夏侯玄伝)。

㉓ 夏侯玄と母丘儉・諸葛誕・李豊・許允(『魏志』九夏侯玄伝及び二八諸

葛誕伝)。許允と李豊・夏侯玄(『魏志』九夏侯玄伝)。桓範(『世説新

語』賢媛篇)。母丘儉と夏侯玄・李豊・文欽(『魏志』二八母丘儉伝)。

㉔ 諸葛誕と夏侯玄・鄧騭ら(『魏志』二八諸葛誕伝)がある。

㉕ 姻戚関係としては、王濛は令狐愚の舅(『魏志』二八王濛伝)。李豊

の子は公主に尚す(『魏志』九夏侯玄伝)。畢軌の子、公主に尚す(『魏志』九曹爽伝注引魏略)。張紹の女は齊王の妃(『魏志』四齊王紀)。諸葛誕の女は王濛の子の妻(『世説新語』賢媛篇)などがある。

㉖ 『魏志』九夏侯玄伝注引魏略

……初明帝在東宮、豊在文学中、及即尊位、得具降人、問江東聞中国

名士為誰。降人云聞「有李安國(李豊の字)者是」。時豊為黃門郎、

明帝問左右安國所在、左右以豊對。帝曰「豊名乃被於吳越邪」。

㉗ 『魏志』十三王肅伝注引魏略備宗伝序及び『魏志』十五劉瓛伝所載

の劉瓛の上疏によれば、太和・青龍年間(二二七―二三六)には避役

を目的として太学に集まる子弟が多く、教師の質は低下し、学生の学

力は落ち、学生の間では「浮虚を求める者各々競逐し」(備宗伝序)

「浮華交遊」(劉瓛上疏)の風潮が盛んであった。

㉘ 増淵龍夫氏「後漢党錮事件の史評について」(『一橋論叢』四四―六)。

㉙ 『魏志』一武帝紀(所引世語)に次の逸話がある。「橋玄謂太祖(曹

操)曰「君未有名、可交許子将(許劭)」。太祖乃遣子将、子将納焉、

由是知名。橋玄は当時「知人」として名高かった。許劭は有名な汝

南月旦評の主宰者である。

㉚ 福永光司氏「何晏の立場―その学問と政治理念―」(愛知学芸大学

研究報告「人文科学」七)。

㉛ 曹操は建安十二年春、十五年春、十九年十二月の三度に亘つて賢才

を求める令を出している。曹操の賢才主義は、一才が秀れていれば人

格に欠点があつても構わないという徹底したものであった。

㉜ 『魏志』九夏侯玄伝。

㉝ 宮崎市定氏「九品官人法の研究」一四八頁以下。

㉞ 『嵇康集』に「与阮德如(阮佃)詩及び侃の編した「宅無吉凶撰

生論」があり、竹林清談の参加者とみられることは第二章に述べた。

㉟ 『世説新語』雅量篇。

③⑧ 『世説新語』言語篇注引嵇紹趙至叙に、

(趙至) 年十四入太學觀、時先君 (嵇康) 在學寫石經古文云々。

という記事がある。嵇康の子紹の著わしたこの史料の信憑性は高いと思われる。嵇康が太學に出入りしていたことは確かであろう。

③⑨ 增淵龍夫氏「漢代における民間秩序の構造と任俠的習俗」(『一橋論叢』二六・五、『中国古代の社会と国家』所収)。

④⑩ 『魏志』二二王粲伝注引魏氏春秋はこの事情を次のように述べている。

康既有絶世之言、又從子不善、避之河東。

と。これがどのような事実を指すか、はっきりしないが、何らかの理由で敵を避ける理由があったと考えられる。

④⑪ 『文選』四三書下。

④⑫ 「声無哀楽論」 「養生論」はいずれも『嵇康集』に載せられている外、後者は『文選』五三論三に收められている。

④⑬ 『世説新語』文学篇に

旧云、王丞相 (王導) 過江左、止道「声無哀楽」 『養生』 『言尽意』 (欣陽建の論) 三理而已、然宛軀因生、無所不入。

とあって、東晋時代に嵇康のこの二論が行われていたことがわかる。また王僧虔の誠子書『南齊書』王僧虔伝) の中に「声無哀楽論」が

「晋家の口実」——清談家の口ぐせ——になっているとあり、齊代にも行われていた。

④⑭ 『晋書』四九阮籍伝。

④⑮ 『世説新語』文学篇。

④⑯ 『晋書』四九阮籍伝。

④⑰ 『世説新語』簡傲篇注引晋百官名。

方外という言葉は『莊子』大宗師の、孟子反、子張琴なる人が友人の葬儀の席で歌を唱っていた行為を孔子が評して「彼遊方之外者也。而丘遊方之内者也。外内不相及。」と言った故事による。

⑤① 宇都宮清吉氏前掲論文。

⑤② 『晋書』三一后妃伝上。

⑤③ 『世説新語』政事篇注引虞預晋書。

⑤④ 『晋書』四三山濤伝。

⑤⑤ 『晋書』四三楽広伝に

(楽) 広与王行俱宅心事外、名重於時、故天下言風流者、謂楽王為称首焉。

とある。

⑤⑥ 『晋書』四三王衍伝に

王衍……風姿詳雅、總角嘗造山濤、濤聽歎良久、既去、目送之曰「何物老嫗生寧馨兒」……。

とある。

⑤⑦ いずれも『晋書』四三王夜伝による。

⑤⑧ 『世説新語』儉嗇篇

⑤⑨ 『晋書』四九向秀伝。

「婢を追う」とは『世説新語』任誕篇の次の逸話を指す。

阮仲容 (咸) 先幸姑家、鮮卑婢、及居得喪、姑当遠移、初云当留婢、既発定将去、仲容借客贖答重服、自追之。

⑤⑩ 『世説新語』德行篇注引王隱晋書に

魏末阮籍嗜酒荒放、露頭散髮、裸袒箕踞。其後貴遊子弟阮瞻・王澄・謝鯤・胡毋輔之徒、皆祖述於籍、謂得大道之本、故去巾幘脫衣服、露醜惡同禽獸。甚者名之為通、次者名之為達也。

とある。

⑤⑪ 嵇康・阮籍・山濤・向秀はいずれも老莊を愛好した(『晋書』本伝による)。阮咸・劉伶・王戎の場合明記されていないが、いずれも任誕行為を行っており、老莊方外思想家と断じてよい。

⑤⑫ 『晋書』四三王衍伝。

# Development of the Great Landholdings in the 9th Century

—especially about forest and field—

by

Yukihiko Maruyama

In the years of Enryaku 延暦, when the reconstruction of the Ritsuryo 律令 System trembling at the development of great landholdings was to be executed, the rulers obtained the cultivated lands as a form of Minyochi 民要地 and made use of the regulating power of peasants' community about the other forest and field to stop the further development of great landholdings, which appeared in the intention of Dajokanpu 太政官符 in December, the 17th year of Enryaku. In fact, in the 8th and 9th centuries the regulation of peasants' community remained in the peasantry and great landholdings could only exist under its regulation; and at the end of 9th century the dissolution of the community was decisive in the tendency of the increasing power of upper peasants. As a result, the governing system on the basis of Minyochi came to a deadlock. A series of Dajokanpu in April, the 4th year of Kanpyo 寬平 shows the powerlessness of the old system and the establishment of the fundamental power by creating Shishi 四至 which was to develop in earnest after the 10th century.

## The So-called *Chu-lin-ch'i-hsien* 竹林七賢

by

Taiko Niwa

*Chu-lin-ch'i-hsien* 竹林七賢 are understood as hermits enjoying *Ch'ing-t'an* 清談, but considering their friendship and their ways of life in detail, it is easy to understand that each of them did not intend to be a hermit. The so-called *Chu-lin-ch'ing-t'an* 竹林清談 is held around *Chik'ang* 嵇康 at *Shan-yang* 山陽 for about 10 years just before the coup d'état of *Szū-ma-i* 司馬懿 in 249 A.D.. In this *Ch'ing-t'an*, under the special situation of the alternation of dynasties, *Wei* 魏 and *Ch'in* 晉, we can find the intention of temporary retirement from the political world

for their self-protection against the political disaster rather than that of simple seclusion.

*Ch'ing-t'an* was originally a leisured argument which had developed in the *Shih-tai-fu's* 士大夫 family life since the latter years of *Hou-han* 後漢, which influenced the public opinion by combining often with the fashion of personal criticism and formed some social power, that is, the so-called "*Fu-hua*" 「浮華」: on the contrary, *Ch'ing-t'an* after *Chu-lin-ch'ing-t'an* had increased a character of discussion omitting political affairs for the political refuge. *Chu-lin-ch'ing-t'an* was a prototype of *Ch'ing-t'an* omitting political affairs, and it contained also various aspects of the *Shih-tai-fu's* life in the transition period.

## A Study of Researching History of Machiavelli

by

Eiichi Sibayama

We cannot refrain from recognizing that the distance of the way to the study of Machiavelli is far greater and remains a sort of puzzle and we are anxious to accelerate gradually a rich synthesis hereafter as a basis of serious studies—each is the great problem for the research of Machiavelli—from all angles especially for about 20 years of late.

Recently a new tendency to grasp Machiavelli from the standpoint of social and economic history like Gramsci is considered as an epoch-making one in a certain meaning of the study of Machiavelli. On the other hand, its present active studies and reexaminations from the standpoints of idea, culture, philosophy, historians' history, literature, philology, ethics and so on look like the grand entrance of so-called cross-examiners on Machiavelli's research just as the idealistic dispute of Renaissance.

On the present standpoint of this Machiavelli's researching circle we are to study by ourselves and critically his political idea with our comparison and criticism of each student during the past 20 years, adding our future outlook to do our poor best.